

## 特集Ⅱ 東アジア 『名作戦争映画』上映会

昨年の『ナンバーテンブルースさらばサイゴン』に続いて今年も長田紀生脚本の映画『軍旗はためく下に』の上映会を計画しました。同時にベトナム映画『DONT BURN』トウイーの日記を燃やすなを上映いたします。

昨年の上映会を通じて、日系南米人をはじめフィリピンやベトナム等から、多数の外国人が三重県内に居住していることを知りました。「面白くなければ映画ではない」が口癖の長田が、重いテーマの結城昌治原作直木賞作品を、どのように料理したのか、是非ご覧ください。面白く映画を観たあとに残る余韻から、激動の時代を迎えている世界の中で、日本人がそして東アジア諸国の人々が、現在を考える契機となるものと確信しています。



DONT BURN



軍旗はためく下に

東アジア『名作戦争映画』上映会  
とき 2016年11月3日(木・文化の日)  
ところ 四日市市文化会館 第2ホール  
【午前の部】 10時  
ベトナム映画 『DONT BURN』  
【午後の部】 13時  
日本映画 『軍旗はためく下に』  
トーク 同脚本 長田紀生

## 『DON'T BURN』評

中村藤生 スタッフ

1970年、南北ベトナムの政治的境界線、北緯一七度線に近い北ベトナム軍とゲリラの小さな野戦病院に女医トウイー・チャムはいた。ハノイの医科大学を卒業間もなく、志願して激戦の最前線で献身的に活動していた。そして医師である前に豊かな情感を持つ一女性であった。夜間はトーチらんぷの灯りで日記を綴っていた。本作品はこの日記を元とすると共に、戦争の中で主を失った日記が30数年を経てトウイーの母親に帰る運命と関わった人々を描いたダン・ニヤット・ミン監督積年の思いが幾重にも重なった映画である。

ここから本作品映画のあらすじ的なことを言っても意味もない。今秋、四日市で「名作戦争映画」と冠して本作品と1970年に公開された『軍旗はためく下に』を上映します。この2作品に共通するところは、女性が主役であること。戦争は男達が始める。結果を引き受けるのはいつも命の源である女性である。トウイーの日記には、かけがえのない日常の心情が淡々かつ赤裸々に記されている。戦地から持ち帰っていた米軍士官フレッドは日記と長年の煩悶を経てトウイーの母親に返すことができた。

### 『DON'T BURN』

2009年 ベトナム 105分

原作 ダン・トウイー・チャム「トウイーの日記」

脚本・監督 ダン・ニヤット・ミン

出演 ミン・フーン(越)、マシユー・コークス(米)

後半の場面でトウイー、フレッドのそれぞれの母の姿はこの映画に現実性と重さを加えて、平和への想いを娘・息子から母が受けついている姿が描かれている。脚本は原作の日記をベースに米・越の関わった人間をよく映像にまとめている。

脚本・監督のダン・ニヤット・ミン氏は1938年ベトナムの古都フエ生まれ。ベトナム戦争中の65年頃から記録映画を撮り始め75年からは劇映画を制作。日本映画『羅生門』『裸の島』、そして小津安二郎に深い感銘を受けた。と語っている。ミン監督は「ベトナムの現実から生まれるベトナム人の心、喜び、悲しみ、幸せ、苦しみだけを映画にすることを確信した」という。

(アジアフォーカス福岡国際映画祭へのメッセージ)から

## 『軍旗はためく下に』評

林 久登 スタッフ

昨年、『野火』を見た後、たまたま44年前の深作欣二監督映画、『軍旗はためく下に』（1972年）を見る機会があった。ずっしりと手応えのある作品で、『野火』の印象は吹っ飛んだ。

映画は『野火』と同じように、第二次世界大戦末期のニューギニア戦線における飢餓の戦場を描いている

『軍旗はためく下に』 1972年 東宝 96分

監督 深作欣二

脚本 新藤兼人、長田紀生、深作欣二

原作 結城昌治

出演 丹波哲郎、左幸子、中村翫右エ門 江原真二郎、夏八木勲

カラー映像の中に、戦闘場面には白黒の固定写真を自在に割り込ませ、当時の戦場の臨場感を出している。手持ちカメラを振り回し、大音響で恐怖をつのる『野火』とは別の手法だが、思いのほか効果はある。問題の人肉シーン。これは見えてのお楽しみ、手を出すまでの細部の描写が素晴らしい。



軍旗はためく下に ©1972 東宝

敗走する日本兵。本部からの指令を無視し、全員で敵陣へ切り込もうとする上官と、無謀な行為を止めようとする主人公らは、争いになる。やがて、それが明るみになり、上官に背いた罪で仲間3人と処刑される。この海岸での最期のシーンが絵的に素晴らしい。カメラはロングに引き、荒涼とした砂浜に正座した3人の姿を撮っている。理不尽な軍のルールにより、異国で命を棄てなければならぬ男たちの無念さが伝わってくる。

映画は後半、生き残った帰還兵3人に主人公の未亡人が戦場で何が起こったか知りたくて聞いて回るシーンが中心となる。すると3人とも話が食い違い、その都度帰還兵の視点で戦地のショットが映される。未亡人は真実を知りたくて、何度も何度も、食い下がって聞くことで、徐々に真相があぶりだされる。このプロセスが素晴らしい。人間が生き延びるためには、いかに自己中心的になるか、『羅生門』を彷彿とさせるものがある。

強制的に軍隊に入れられ、非人間的な組織のきまりに縛られ敗走する日本軍。戦場の中で生きるとはどういうことなのか、戦争という事態に駆り立てた天皇責任まで踏み込んでいく。見事というほかない。怖いもの知らずの新進気鋭の当時

30歳の長田、42歳の深作の2人が、タグを組んで作り上げた執念の作品だ。『野火』など歯牙にもかからない。今、これだけの映画を作る覚悟の監督がいるだろうか。映画界は変にシュリンクしている。もつとタブーにも果敢に挑戦する映画作家はいないのか。44年前の作品を凌駕するものが出てこないとは寂しいではないか。

## 時代のアイデンティティ

長田紀生 脚本家

1972年（昭和47年）――。

その年の1月24日、横井正一元帝国陸軍軍曹が、グアム島で28年ぶりに救出された。多くの日本人にとって、忘れてかかっていた戦争の記憶が否応なく呼び覚まされる出来事だった。

札幌冬季オリンピック開幕、連合赤軍の集団リンチ殺人事件、あさま山荘事件、更には高松塚古墳の彩色壁画発見、ノーベル賞作家・川端康成の自殺、沖縄返還に関わるアメリカとの密約を暴露した外務省極秘電報の漏洩等々、この年の春には様々な事件が重なった。5月、沖縄返換。誤った戦争の重要なオトシマエの一つであり、沖縄県民の悲願でもあつ



た筈の祖国復帰だが、その内実は極めて不平等であり、沖縄の犠牲を更に深刻化させるものであった。そして9月の日中国交回復、これもまた同様に、戦争のオトシマエであり、日本のアジア諸国に対する責任のあり方を考えさせるものだった筈だ。7月、『日本列島改造論』を引っ下げて田中角栄内閣が誕生した。沈滞ムードを強めていた景気の回復と高度経済成長をなおも促進しようとする政財一体となった意図がそこにはあった。だが、既に列島を深く蝕んでいた公害、環境破壊、構造的格差の実態を、この改造論はほとんど無視していた。人々は土地ブームに狂奔し、バブルへの道を突き進み、その一方で、水俣、阿賀野川水銀汚染、富山イタイイタイ病、四日市ぜんそく等々が、悲惨な状況を垂れ流しにしていたのである。

『軍旗はためく下に』はそういう時代の真ただ中で制作された映画である。時代状況を見つめる監督や脚本家たちの視点がどこにあるのか、是が非でも作ろうとした意図は何か……、些かなりとも感じとって頂ければ冥利に尽きる。『軍旗はためく下に』はまぎれもなく『昭和』の映画である。一人一人の人間と同じように、時代にもアイデンティティがあるとするれば、『昭和』のアイデンティティは『平和への決

意と覚悟』だと私は思っている。平和の対語は、戦争、核兵器、テロリズム、差別、偏見、更には原発、基地、安保法制、憲法改正 e t c、 e t c。今、『昭和』のアイデンティティが危機に瀕しているような気がしてならない。上映会当日、映画制作の実情と共に、そのことを観客の皆さんと話し合いたいと思っています。



軍旗はためく下に ©1972 東宝